様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３１６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００８３

研究課題名（和文）西洋9～14世紀の自由学芸における音楽の位置

研究課題名（英文）Music in the European Liberal Arts Tradition (from 9th to 14th Century)

研究代表者
関沢　和泉（SEKIZAWA, Izumi）

東日本国際大学・東洋思想研究所・准教授

研究者番号：９０６３４２６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：教養・一般教育の源流、中世の自由学芸の内、文法学（適切な文を算出する能力を育成）や音楽（学）（音の構造を理解、歌等を算出する能力を育成）は、生得的能力の開発と言う点で能力開発に焦点を当てる現代の一般教育と通じる。本研究は中世の音楽（理）論の基盤となる諸概念について9世紀から14世紀に至る変化を追い次の点を明らかにした。①通念に反し実践と理論との往復が常に問題であり思弁的要素はアリストテレス再導入後13世紀に分離。②他の動物と共通の生得的能力として記述され続けていた音楽は13世紀以降、人間の諸能力のどこに位置付けられるかが再検討され、動物と人間の境界線引直し、学問と能力の関係の定式化に寄与。

研究成果の概要（英文）：We find in the European liberal arts tradition a certain ancestor of the current trend of enhancing (generic) skills in higher education. According to this tradition, for example, grammar and music enhance some innate faculties. In this research, the case of music from the 9th to 14th century was traced and the following points were revealed: first, the 'speculative' approach to the music was clearly reshaped just after the reintroduction of the corpus aristotelicum (esp. after the 13th century) and many authors of these centuries considered 'musica humana' simply as vocal music, which played an important role in the episteme of the period, differently from the common narratives; second, the reintroduction of the Aristotelianism transformed the theoretical meaning of music; some authors of the 13th and 14th centuries tried to relocate the abilities concerning music, previously considered simply as shared ones by the humans and other animals, into a certain domain proper to the humans.

研究分野：思想史・哲学史

キーワード：中世思想史　音楽思想史　中世哲学　学問史　芸術学　思想史　学問論　生得性

１．研究開始当初の背景

現在の高等教育における教養教育の遠い源流を成す一連の自由学芸（自由七科――言語に関わる三科〔文法学、修辞学、論理学〕および数に関わる四科〔算術、音楽（学）、幾何学、天文学〕）において、古代末期から中世そして近世に至る流れの中で、どのようにその内部の諸学問の関係が変化していったか、また自由学芸と神学といったその他の領域との関係（上下関係か並列か等々）が変容していったかを解明することは、歴史的研究としての意義がある。だが、それだけではなく、現在、高等教育において教養教育・一般教育の再編が、特にジェネリック・スキルの育成に焦点をあてて行われている中で、中世における文法学（言語能力を育成し、勉学も含めたその他の活動に備える）や音楽（学）（音の構造を受け止め、理解し、歌等を産出する能力を育成する）の当時の状況を明らかにすることは、教養教育・一般教育の現代的な意義の再検討にも、寄与するものとなる。しかし、全体的な傾向として、この時期の自由学芸については、それぞれの分野ごとの基礎的な研究は積み上げられつつあるが、分野ごとに濃淡のある形で進展してきたこともあり、分野間の接続は十分にはなされていない。

分野ごとの濃淡と言うのは、たとえば言語に関わる三科の中世における展開の研究において、論理学についての研究が、分析哲学の発展と若干の交差を見せつつ一足早く進展したのに対し、文法学の研究については、チョムスキーの『デカルト派言語学』への応答の中で、やや遅れて、歴史的に重要なテクストの発掘へと繋がっていった。また、今回の研究の主な資料としている音楽（理）論の分野では、音楽理論の発展に焦点をあてる形での資料の発掘は進んできたが、その基盤にある基礎的な概念（哲学的概念）の分析についての研究が増えてきたのは近年のことである（たとえば C. Panti, *Filosofia della musica. Tarda Antichità e Medioevo*, Carocci, 2008）。

分野間の関係については、特に科学史寄りの関心から研究されることが多い数に関わる学科の展開の歴史と、哲学（史）寄りの観点から研究されることが多い言語に関わる学科の展開の歴史については接続が十分ではなかった。しかし、たとえば日本における研究状況として、以上のような問題意識から、中世哲学の研究の中心の一つである西洋哲学会において、2013 年度、2014 年度にわたり「中世の自由学芸」をテーマとしたシンポジウムが開催され、自由学芸の全領域を網羅し、その展開を古代から中世にかけて追うという研究が本格的にスタートしている（なお本研究の研究代表者は同シンポジウムに関わっている）。

２．研究の目的

以上のような研究状況を背景とし、本研究では、二つのことを目的とした。

（１）当時、音楽の分野において、人間の生得的能力としての音楽（能力）と、学問としての音楽（学）が、どのように関係するものとして理解されていたか、またその理解が変動したかを検討することとした。特に、これまで研究代表者は、文法学の分野において、言語に関する知の生得性の分析がどのように十三世紀の言語（理）論・言語哲学に影響を与えたかを発掘してきたが、この文法学における生得性についての議論に並行した議論が音楽の分野においてもどうやら確認できることが分かり、しかしその導入のされ方の歴史的なタイミングが異なっているようであるため、音楽の分野における展開を調査することで、自由学芸の展開をさらに明確に跡づけることができるからである。

（２）また、そうした音楽（能力）の生得性を論じる際には、動物の音楽（的）活動と、人間の音楽活動をどのように理解するかという要素が入ってくる。それらは同じものなのか、あるいは似ているが多少の差異があるものなのか、それとも根本的に異なるものなのか。特に、音楽は心身に働きかけ、ある種の治療効果を持つものとして記述されてきた伝統があり、その際に動物への音楽の影響に言及されることが多いため、これは重要である。そのため、これらがどのように理解されてきたかを歴史的に追跡する。また、この動物の音楽的活動との関係を分析することは、言語思想において、はっきりと異なるものとして描かれることが多い人間の言語活動と動物の音声的コミュニケーションという区別（人間はロゴスを有するが、動物は有さず、ただ音声だけを持つという視点）が、どのような基盤の上になりたっているかを最終的にあきらかにすることに繋がるため重要である。

３．研究の方法

音楽（理）論のテクストは、すでに多く校訂されており、二十世紀初頭までにされた、必ずしも現在の水準では十分といえないテクストも、再度校訂されつつある。すでに分析の速度以上にかなり量のテクストが校訂されつつあるということもあるが、それらのテクストは音楽理論の発展の観点から読まれ分析されることが多く、それらに含まれている学問論的・思想的・哲学的アプローチ、諸概念については十分に汲み尽くされていない。本研究では思想史的アプローチにより、九世紀から十四世紀までの音楽（理）論に言及するテクストを分析し、そこで展開され前提されている諸概念、特に以下に述べるボエティウスに由来する三区分と、後に導入される二区分の関係、また≪musica humana≫の意味の多様性とその変遷、人間の音楽的能力を記述する際の動物の音楽的能力への言及の変化を追った。

またその際に、研究代表者がこれまで掘り起こしてきた文法学に関する一次資料との対比を行った。

４．研究成果

この研究の中で明らかになった点として重要なのは、ボエティウスの音楽の三区分の中で、≪musica humana≫という表現が当時実際にどのような意味で解されていたか、またそれが決して些細な問題ではないということである。

一部の例外（A. Morelli, ‘Armonia cosmica, *musica humana* e canto liturgico nel pensiero musicale alto-medioevale’, in *Harmonia mundi. Musica mondana e musica celeste fra Antichità e Medioevo*, ed. M. Cristiani *et al.*, SISMEL/Edizioni del Galluzzo, 2007）を除いて、伝統的に、限られた中世の著作に基づき、この概念は、宇宙の調和を示す≪musica mundana≫と具体的な楽器が作り出す音響による音楽≪musica instrumentalis≫との間で、声楽ではなく、身体の諸要素（元素）の調和を示す概念であると理解され、例外的に、あるいは副次的に声楽を示すこともあったと記述されてきた。しかし、これらの語は中世当時においても既に意味が明確ではなく、解釈を要する語として理解され（それゆえに、これらの語は、あえて「宇宙音楽」「人間音楽」「器具音楽」といった座りの悪い語で翻訳されるべきだと考えられる）、実際に解釈が分かれていただけでなく、多くの音楽分野のテクストで「人間が声として発する音楽」のことを意味していた。そして、このように理解されることには、小さくはない理論的意義があった。それはいかなることか。

ボエティウスの音楽の三区分に加え、900年前後のプリュムのレギノのテクストにおいて≪musica naturalis（自然による音楽）≫と≪musica artificialis（技芸による音楽）≫という区分の導入が見られ、これが三区分の意味を別様に変容させる。エリウゲナの影響があるともされるこの著者においては、音楽がまずこの二つのカテゴリーに二分され、三区分はその下位カテゴリーとなる。具体的には≪自然による音楽≫の中に、天体の運動により生じるとされる≪宇宙音楽≫、人間の声が作り出す≪人間音楽≫、人間以外の動物が生み出す音楽（鳥の歌声等）が数え入れられる（鳥の歌声が人間の歌と類似のものとして扱われるのは、彼らが他の鳥の歌を模倣したりするするからとされている）。これらの器具（楽器）を用いることがない≪自然による音楽≫は、器具（楽器）を用いた≪技芸による音楽≫と次のような形で対比される。自然による音楽は、器具（楽器）を用いた技芸による音楽に先立って存在しているが、楽器を用いた技芸の音楽が生じてはじめて、それら自然による音楽の力を正しく認めることができるようになったのだ、と。そしてそれは、目に見えるものを通して、目に見えないものを示すような関係なのだと。

一部の研究者のように、このような900年前後のテクストにエリウゲナの影響を見て、思弁的な音楽観を見出すことも可能だろう。だが、100年後の『音楽についての対話』という対話編を見ると、上記の見えるものと見えないものの関係は、どうやら極めて実践的な構図として理解されていたことが理解出来る。このOdoと呼ばれる何者かにアトリビュートされることもある教師と生徒による音楽についての対話編において、モノコルドという一弦楽器（箱の上に弦を一本張り、振動する弦の長さを変化させることで音程を変化させる楽器）による音楽へのアプローチが、いかに声楽をも変容させたか・させうるかが明確に描き出されている。このテクストによれば、モノコルドにより音程関係が距離の関係として可視化されることで、声を出して歌うものたちも、はじめて正確に音程を区別・把握し、記憶し、正しく歌うことができるようになり、それにより音楽（学）は完成されるというのである。同様の見解は、十一世紀末から十二世紀初頭の『Vivellによる逸名者ミクロログス註解』等にも見られる。ここには学問としての音楽（学）が介入することで、自然的な活動あるいは人間や他の動物においてある種の能力として存在する音楽が、理論的に観察され、操作可能な対象として浮かび上がるという構図が既に描き出されており、その構図の中では、≪人間音楽≫は、身体における諸要素の調和としてよりも、あるいはそれが背景にあったとしても、むしろ実際に音声として発出される歌として理解される必要があったことが分かる。

この三区分の中に、人間以外の動物たちの音楽が言及されていたように、すでに900年から1000年頃のテクストにおいて、人間以外の動物の音楽が、音楽の記述にとって無視出来ない位置を占めていた。そこで人間の音楽とその他の動物の音楽との間に全く差異が導入されていないわけではないが、その関係は十三世紀以降に大きく再検討されることとなる。

たとえばアリストテレスの『政治学』がラテン語に翻訳され、解釈され再導入されて以降の1300年頃に書かれたヨハンネス・デ・グロケイオのテクストは、人間以外の動物においては、音の快を感じる能力はあるが、音程関係の協和・不協和を感じる能力は人間のみに備わると論じる（これは、アリストテレスの『政治学』において、動物は音声のみをもち、人間はロゴス〔理性、筋道だった言葉、比〕を持つとされるのと並行している）。これは人間の魂がより完全であるからとされ、人間と動物の間の差異が、決定的な断絶として構築されることになる。

だが、他方で、より遅いニコル・オレームの1350年頃のテクストにおいては、各旋法

がどのような感情を人間だけでなく動物に引き起こすかが記述され、動物とある程度共有する形で音楽が心身に働きかける、ある種生理学的でもあるようなプロセスとして、音楽が記述されていることを確認することができる。これは音楽の引き起こす情動の変化のより詳細な分析へと繋がっていくものだろう。

なお十三世紀末にラドゥルフス・ブリトーが数に関わる一連の学問における様々な問題を論じた討論集には、各地方で旋法が異なることから、人間には生得的な音楽〔能力〕などないのではないかといった、当時の音楽の隆盛を反映していると思われる文化相対主義的観点と、アリストテレス的タブラ・ラサ論（初期状態で魂に書き込まれているものを極小化する）の交差も見られる。

このようにアリストテレスの再導入は、確かに、音楽を産出する主体（人間、その他の動物、楽器、天体等）と、産出された音楽に生体がどのように影響を受けるか、また学問としての音楽と、実践される音楽との間の関係の定式化に影響を与えたが、それは必ずしも、研究者も含め広く語られてきたような、中世の音楽（理）論は、思弁的なものから、実践と結びついたものへと変化していったという構図ではなく、少なくとも音楽の分野においては、九世紀からの連続した議論、あるいは少なくともそこから受け継いだ諸要素を組み替えるような形で働いたものであるということを明らかにすることができた。

特に、冒頭であげた研究の背景とも関係し、学問の歴史として重要なのは、人間が生得的に音楽（の能力）を有しているとしたら、なぜ学問としての音楽が必要であるのかという問は、十三世紀のアリストテレス的な学問論の隆盛に伴ってはじめて問われたわけではなく、すでに 900 年前後に、技芸（ars）としての音楽が技術（ars）としてのモノコルドと一体となった形で介入することではじめて音楽が目に見える理論の対象となることが示されているように、アリストテレスの再導入以前に既に存在したのであり、十三世紀の変動は、それに対する別様の視点を導入するという変化であることが明らかとなった。これは単に音楽（学）の領域にとどまらず、他の自由学芸や、当時の学問一般の理解にとっても重要な発見であり、今後はさらに他の分野の変動との関係を比較する必要がある。少なくとも現時点で言えることは、文法学の分野と比較すると、文法学の分野では、人間の言語能力を人間固有のものとする傾向が全体として強いこともあり、学問を可能にする基盤となるような、研究対象としての言語能力の確保という問題は、音楽（学）の分野におけるように、長い期間に渡りゆるやかに連続しているものではなかった。このことが西洋における言語観（ロゴス観）に由来すると言えるのか、それともより偶発的に、当時典拠とされていた一連の書物の偶発的な配置によるものかは今後さらなる検討が必要であるが、少なくとも、自由学芸の間に、展開のリズムと方向性の大きな違いがあることを、文法学と音楽（学）という例を通して、より具体的には人間と動物の差異がどのように表象され、どのように同一の、あるいは異なった理論的装置を用いて分析・固定されてきたかのという形で、示すことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 関沢 和泉、大学の時代の《musica humana》―自由学芸の一科としての音楽とその展開のリズムについて―、中世思想研究、招待、Vol.57、2015、pp.143-147、http://jsmp.jpn.org/jsmp_wp/wp-content/uploads/smt/vol57/143-147_horon-sekizawa.pdf

② 関沢 和泉、Accessus 系テクストは十三世紀の大学の「三つのポリシー」を伝えているか？、中世思想研究、招待、Vol.57、2015、pp.88-99 、http://jsmp.jpn.org/archives/journals/smt57/

③ 関沢 和泉、ヨーロッパにおける漢字受容の初期形態について、研究東洋、紀要論文、Vol.5、2015、pp.75-94

〔学会発表〕（計６件）

① 関沢 和泉、Philosophical Animals in the Middle Ages 、 The 10th International Conference of the Taiwan Association of Classical, Medieval and Renaissance Studies、2016 年 10 月 27 日、屏東（台湾）

② 関沢 和泉、How Music Was Able to Soothe the Mental Illness in the Middle Ages、The Ninth International Conference of the Taiwan Association of Classical, Medieval and Renaissance Studies、2015 年 10 月 23 日、台北（台湾）

③ 関沢 和泉、musica humana はなぜ声楽であると考えられなければならなかったのか？、西洋中世学会 第 7 回大会、2015 年 6 月 13 日、東洋大学（東京都・文京区）

④ 関沢 和泉、Accessus 系テクストは十三世紀の大学の「三つのポリシー」を伝えているか？、中世哲学会 第 64 回大会、2014 年 11 月 10 日、中央大学（東京都・八王子市）

⑤　関沢 和泉、［関連補論］中世の音楽像について、中世哲学会 第 64 回大会、2014 年 11 月 9 日、中央大学（東京都・八王子市）

⑥　関沢 和泉、言語起源論 —— 1270 年、1600 年、バロック・スコラ哲学研究会 第 3 回、2014 年 4 月、慶応大学（東京都・港区）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
①　〔アウトリーチ活動・市民講座〕関沢 和泉、ロゴス, 動物 / 人間, 音楽——欧州 1200 年代、第八回昌平塾、 2015 年 11 月 20 日、東日本国際大学東京事務所（東京都・早稲田）

６．研究組織
(1)研究代表者
関沢　和泉（SEKIZAWA, Izumi）
東日本国際大学・東洋思想研究所・准教授
研究者番号：90634262

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)